

『最後の授業』

- 一国家＝一民族＝一言語という「常識」の陥穽

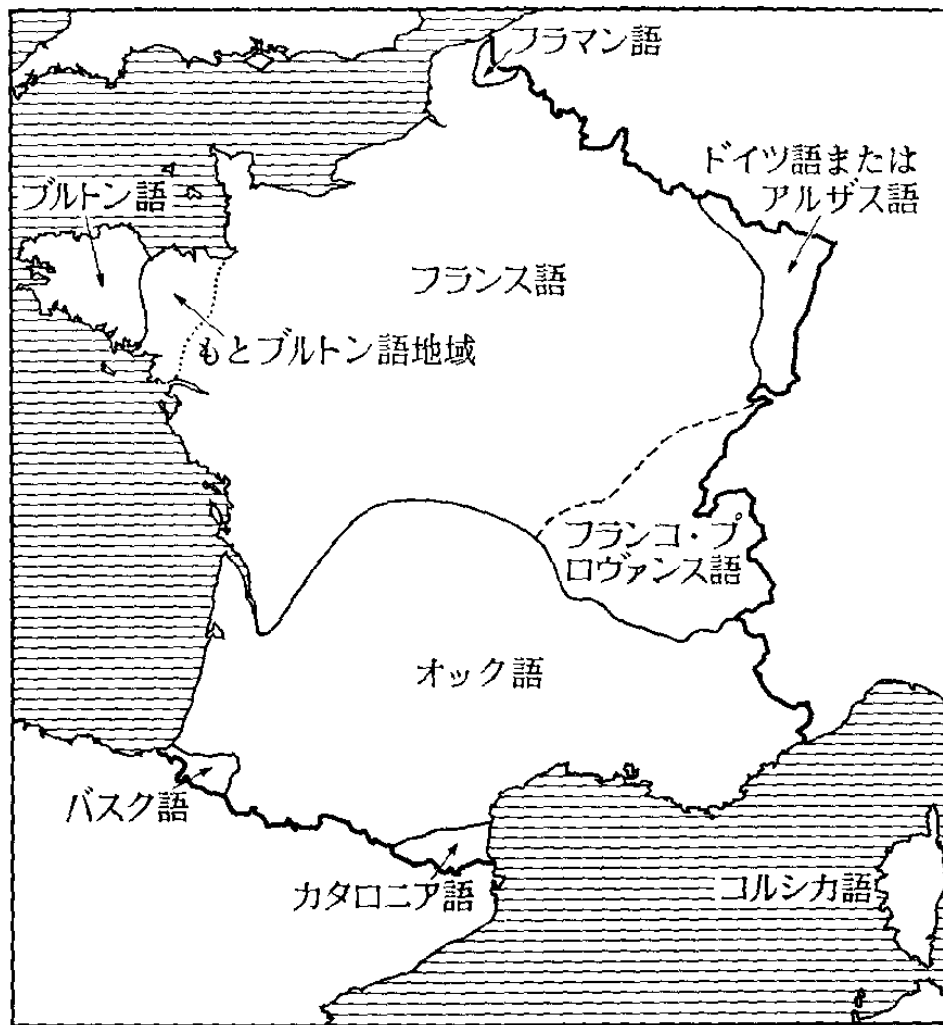
→母語(lengua materna)＝母国語(国家公用語
lengua oficial)

※「母国語を奪われそうになる人々の悲しみと、死んでもそれを奪われまいと決意する、自分たちの言語への愛着を見事に画き出している」(鈴木孝夫『閉ざされた言語・日本語の世界』新潮社、1976年)

○朝鮮侵略をはじめとする日本の戦前の歴史への反省

○第二次世界大戦敗北後のアメリカの沖縄占領への批判

○母国＝母国語の愛護・発展 ⇒国家ナショナリズム



フランスにおける言語分布
 (G. Kremnitz, Die ethnischen Minderheiten
 Frankreichs 1975 による)

付録 「最後の授業」関係年表

1840(天保11)年	ドーデ、ニームに生まれる
1857(安成4)年	パリへ上京 (17歳)
1865(慶応元)年	アルザス方面へ旅行 (25歳)
1869(明治2)年	『風車小屋だより』刊行 (29歳)
1870(明治3)年	●普仏戦争開戦
1871(明治4)年	『月曜物語』連載開始 ソワール紙(7月～翌年3月) (31歳)
	●独軍パリ入城 ●パリコミューンの乱
1872(明治5)年	『月曜物語』レヴェヌマン紙に連載(4月～12月)
	5月13日「最後の授業」発表 (32歳)
1873(明治6)年	3月『月曜物語』ルメール書店から刊行 (33歳)
1876(明治9)年	小説『若いフロモンと兄リスレール』でアカデミー賞受賞 (36歳)
1886(明治19)年	『川船物語』刊行 (46歳)
1889(明治22)年	『緑葉嘆』森鷗外により翻訳紹介(『読売新聞』)
1897(明治30)年	ドーデ、12月に急死 (57歳)
1900(明治33)年	●小学校令改正。「国語科」の成立
1902(明治35)年	「をさな心」と題して「最後の授業」翻訳紹介(『新小説』3月号)
1904(明治37)年	●第一期国定教科書『尋常小学読本』使用開始
1906(明治39)年	『新教師』翻訳紹介(『読売新聞』)
1924(大正13)年	『最後の授業』(鈴木三重吉)『赤い鳥』6月号に掲載
1925(大正14)年	『小学児童文学讀本』(副読本)に「最後の授業」収録
1927(昭和2)年	『新撰国文讀本』(中学校用教科書)に「フランス万歳」、『最新女子国文』(高等女学校用教科書)に「最後の授業」収録
1929(昭和4)年	パリ、フランス書店から「決定版」全集刊行開始(1931年まで)
1931(昭和6)年	『村の学校』と題して「新しい先生」翻訳紹介(『赤い鳥』2月号)
1936(昭和11)年	桜田佐訳『月曜物語』(岩波文庫)刊行
1937(昭和12)年	『最新女子国文讀本』、『新女子国文』(いずれも高等女学校用教科書)に「最後の授業」収録
1939(昭和14)年	永井順訳『川船物語』(富山房百科文庫)刊行
1941(昭和16)年	●「国民学校令」公布。●『初等科国語』使用開始
1945(昭和20)年	●ポツダム宣言受諾(敗戦)
1947(昭和22)年	●「学習指導要領一般編(試案)」●教科書検定制度発表
1952(昭和27)年	『中等国語』『中等新国語』(中学校用教科書)に「最後の授業」収録
1956(昭和31)年	『新編国語の本』(小学校用教科書)に「最後の授業」収録
1971(昭和46)年	『小学校国語』『小学新国語』(小学校用教科書)に、新訳「最後の授業」収録(これ以降「最後の授業」は国民教材化する)
1977(昭和52)年	全国の小学6年生の87%が、この教材を学習することになる
1981(昭和56)年	『ことばと国家』田中克彦(岩波新書)刊
1986(昭和61)年	『文芸研・教材研究ハンドブック アルフォンス・ドーデ／はぐるま編集部訳＝最後の授業』(明治図書)刊
	3月を限りとして小学校検定教科書から「最後の授業」が消える

【個人の言語権】

「今こそ標準ドイツ語によって、アルザスから方言を駆逐しなければならない」（1888年、上アルザス県学務審議官の発言）（西山2000、19頁）

※個人言語としての〈母語〉／言語共同体の「母語」（＝領域言語）

〈方言〉——〈標準語〉

〈母語〉——〈母国語〉

〈地域固有言語〉——〈国家公用語〉

／ダイグロシア diglossia（下位言語と上位言語）

「世界言語権宣言」／「世界人権宣言」

【参考文献】

【「最後の授業」をめぐって】

アルフォンソ・ドーデ(桜田佐訳)『最後の授業』(偕成社文庫、偕成社、1993年)

- 田中克彦『ことばと国家』(岩波新書、岩波書店、1981年)
- 同「教材としての『最後の授業』」(朝日新聞夕刊、1982年4月8日)
- 同「『最後の授業』始末記」(岩波書店『図書』、1982年6月号)
- 同『法廷にたつ言語』(恒文社、1983年)
- 田中克彦、H.ハールマン『現代ヨーロッパの言語』(岩波新書、岩波書店、1985年)
- 金子亨「アルザスの言葉」(蔵持不三也編『フランス・国境の地アルザス』、社会評論社、1990年)
- 府川源一郎『消えた「最後の授業」』(大修館書店、1992年)
- 中村敦「『最後の授業』についての覚え書き——三つの解釈をめぐって」(『成城文芸』133号、1990年)

【「アルザス・ロレーヌ問題」をめぐって】

- ウージェーヌ・フィリップス(宇京頼三訳)『アルザスの言語論争』(白水社、1994年)
- フレデリック・オッフエ(宇京頼三訳)『アルザス文化論』(みすず書房、1987年)
- パウル・アサール(宇京早苗訳)『アルザスのユダヤ人』(平凡社、1988年)
- ジャック・ロレーヌ(宇京頼三訳)『フランスのなかのドイツ人——アルザス・ロレーヌにおけるナチスのフランス壊滅作戦——』(未来社、1989年)

- 一坂口昂『獨逸帝国境界地方の教育状況』(朝鮮総督府、1913年)
- 一保科孝一『エルザス・ロートリンゲン州の国語教育に関する調査報告』(朝鮮総督府、1913年)

- 一天野智恵子「フランス革命期の地方言語問題」、和歌山大学『紀州経済史、文化史研究紀要』第11号、1991年、83-101頁
- 一内田日出海「州・国家・ヨーロッパ——アルザス・アイデンティティの歴史的起源——」、鈴木健夫編『「ヨーロッパ」の歴史的再検討』早稲田大学出版部、2000年、85-124頁(同「アルザスにおける地域的アイデンティティの起源」『東京国際大学論叢・経済学部編』第15号、1996年、修正加筆)
- 一坂井一成「フランス地域研究とアイデンティティ——ナショナリズム、エスニシティ」、東京外国語大学中嶋嶺雄ゼミナール『歴史と未来』第20号、1994年
- 一同「戦後アルザス地域主義の展開——政治意識の変容をめぐって」、一橋大学『一橋論叢』第114巻第2号、1995年
- 一同「アルザス・エスノ地域主義とヨーロッパ統合——フランス・ナショナリズムとの相互作用」、日本国際政治学会編『国際政治』第110号、有斐閣、1995年
- 一中山真生子「アルザスと国民国家——『最後の授業』再考」、『思想』第887号、1998年、54-74頁
- 一西山暁義「郷土と祖国——ドイツ第二帝政期アルザス・ロレーヌ民衆学校における『地域』——」、『歴史評論』第599号、2000年3月、14-26頁
- 一渡辺和行「アルザスとエルザス——ナシオンとフォルクの狭間で——」、『香川法学』第16巻第3・4号、1997年3月、1-48頁

【地域アイデンティティとヨーロッパ・アイデンティティ】

- 宮島喬「差別意識と民族——『ナシオン』の解体」、二宮宏之編『深層のヨーロッパ』山川出版社、1990年、363-402頁
- 樺山紘一・長尾龍一編『ヨーロッパのアイデンティティ』（ライブラリ・相関科学 1）、新世社、1993年
- 遠藤輝明「フランス・レジヨナリズムの歴史的位相」、遠藤輝明編『地域と国家——フランス・レジヨナリズムの研究』日本経済評論社、1992年、1-48頁
- 川田順造編『ヨーロッパの基層文化』岩波書店、1995年
- 西川長夫・松宮秀治編『幕末・明治期における国民国家形成と文化変容』新曜社、1995年